

## 地域産業発展の基本を考える

農業から工業、貿易への転換を実施して

上



上野 隆一

ア諸国に納品するものが増えており、当社の業務の中で輸出入取引は大きな割合を占めている。振り返って考えてみれば、昭和四十年代、第一次オイルショックが始まる前、それ

庄内で十六代続いた老舗の農家に生まれて五十二年。当然農業を継ぐべき立場の私が電子部品にかかわりを持ってから二十年近くが経過した。事の発端はある会社から「こんな仕事があるけどやってみないか」と誘われて気軽に農作業の合間にならと引き受けた仕事であるが、作物を栽培したり動物を飼育する仕事より、人間とかかわりを持つ仕事のほうが自分に向いてるとおぼろげながら意識し、傾斜を深めたというのが実状である。そうは言うものの、金はない、技術はない、人もいない、おまけに知識のない人間がはじめたことであるから下請けの下請け、つまり内職に毛の生えたところからが憐ウエノのスタートである。私が三十代前半のころである。

但し電子部品といっても一般の人がイメージするようなクリーンルームで白衣を着た作業者が極小の部品を顕微鏡で覗きこむとか、高価な機械が無人の工場で製品を休みなく作り出すというような代物ではとてもない。

### 海外で生産、海外へ輸出

製品の機能としてはノイズをカットする部品であるから、いろいろなデジタル回路に使用されている、いわば先端的というかまあ八

イカラなところに使われている部品ではある。ところがそのハイカラな部品の作り方がすごい。フェライトのリングコアに電線を巻いてノイズフィルターを作るのであるが、いってみれば五十円玉に銅線を通して数十回巻きつけるような作業である。一応自動化された巻線機はあるにはあるが、完成度が低くて実際には使い物にならない。したがって簡単な治具を使って手で巻くわけである。その数およそ二千人、生産数量は月四百万個が現在の生産概要である。リング型コイルの生産数としては、推測であるが国内で一番だと自負している。但し、人件費の高い日本で作っては商売にならないから二千人の大半は海外である。中国の大連で十年前からコイル生産を開始し、五年前からは北朝鮮の平壤でも生産をはじめた。コイルの材料は国内メーカーからも購入するが、

アメリカ、韓国、台湾、中国など輸入品も多い。また製品の出荷先も国内のみならず、韓国、香港、インドネシア、マレーシアなどのアジア

## 流

まで純粹の水田単作を行う農村地帯だったここ庄内地方に、猛烈な勢いで通称「電子」とか「弱電」といわれた電機機器産業が進出してきた。当時の日本にとって外貨を生み出す打ち出の小槌は車と電気製品、それにカメラと時計だったように思う。これら世界一流の製品はその多くを近畿、東海、中部、関東から端を発したが、まもなくその製造拠点を東北と九州に移してきた。言葉が通じ、文化が同じでしかも賃金の安いところが狙い目だったからである。九州のことは知らないが、東北の人は良く働く。とりわけ庄内の女性は寝る間も惜しむほどの働き者であるからこれに目をつけた進出企業はえらい。

### コメ依存が阻む新産業起こし

これによって米しかなかった庄内は電機機器産業の生産拠点となったが、長くは続かなかった。バブル景気が崩れてからは価格にシビアになった電気機器メーカーは国内生産から海外へと移行した。おいてけぼりを食った庄内は未だに次の目玉を作れないでいる。

いうまでもなく庄内は米作地帯である。美しい田園風景はここに生まれ育ったものの誇りである。子供の頃によく大人から「三町歩あ

れば、だんまたって飯食える」と聞かされてきたが、今になってこの言葉はつくづく庄内の風土を象徴しているように思う。いつだったか、ふつと米が庄内をだめにしているのではないかと思つたことがあつた。米を作れば大過なく生活ができたからそれ以外の世界を見る必要がなかったのではないか。結局のところ米から「おんぶにだっこ」してもらい進取の気風が欠け落ちたから新しい産業基盤ができないのだと。

同じ山形県で庄内と対比して置賜を見ると興味深い。置賜盆地は狭くて米が取れないから、米織に代表される繊維工業に端を発し、現在では電気機器産業の一大拠点となつていゝる。その大きな理由として関東から近いという地理的要因はあると思う。確かにそれを言うなら庄内は一番遠い。しかし海があるではないか。酒田は北前船によつて発展した街だといふ。言われてみれば我々が話す庄内弁には関西の文化が色濃く漂つてゐる。港だけでなく、庄内一円に広がつてゐる言葉の文化にこれほどの影響を与えたその昔の京阪神との交流はどれほどよかつたのだろうか。私の拙い想像力では実像が浮かんでこないが、いゝえることは海が新しい世界を運んでくれたことは確かである。

### 建設業も国のサジ加減次第

話は変わるが、帝国データバンクが毎年東北地区主要企業一万三千社要覧」といふ本を出している。(書店では販売されていない)内容は各企業の資本金、従業員数、売上高、利益を掲載してあるだけである。私はこつこつデータをみるのが好きなので、毎年この中か

## 潮

ら庄内にある企業だけを抜き出しパソコンに入れてリストを作つてゐる。その数のおおよそ四百社内外であるが、庄内の分野別企業の特徴は他の地域に比べ建設業

が多いことである。残念ながら、建設の割合が高いというのは喜ばしいことではない。なぜなら第一に他の産業が未発達であることを物語つてゐる。第二に建設は公共事業に負うところが大きいので実需というよりは見かけ上の需要を作つてゐるに過ぎない。つまり、公共事業は政治的部分が強いので国土の均衡的発展の見地から産業基盤の弱い地域に経済的にこ入れを行うために行ふ事業としての役割があると私は考える。したがつて自立的経済基盤が備わつていゝれば、結果において建設業の割合は極端に多くなることはないのである。第三には国のさじ加減ひとつで大きく揺すられるのは気持ちのいいものではない。建設業の決算を見ると一九九六年、九七年はここ数年で最も高い数字を出している。これは不況対策で国が大盤振る舞いをしたからである。ところが九八年、九九年は連続して下降している。これは国が息切れして公共事業を圧縮してきたからである。

思い起こせば、庄内の農業が輝いていたのは食糧管理制度が金科玉条のごとく守られてゐる時だった。そのとき新聞では食管赤字が何千億とか連日米価批判があつたのを思い出す。次の時代庄内に出現したのは電子だったが、これもバブル景気の崩壊とともに中国や

東南アジアに去つた。この地域に本社機能がなくて使い捨てされたようなものであつた。そして現在には前に述べた公共事業主導が前面に出る。日本の中でここだけが特別悪いとは思われないが、どうも波間にもてあそばされる小船の存在と感ずるのは私だけだろうか。

### 対岸交易に自立的発展の礎

自分がやつてるから言つのであるが、貿易は面白い。なぜなら物の価値が国によつて違ふのである。日本で高いものが安く、安いものが高いなど日常茶飯である。文明度が違ふのは当然として文化基準が違ふことにはしばしば出くわす。日本海を隔てた対岸諸国は戦後久しく敵性国家であつた。私が小学生の頃は中国を中共と呼び、中国領の地図が真っ白だつたことを思い出す。

来年から始まる新世紀は、明けて間もなく日本海を取り巻く国同士が普通に付き合い得る関係が構築できるものと確信している。庄内はこの機をつかまえ、海の向こうから新しい世界を引き出し、自立的発展の礎を築く切り札にしなければならぬ。(次号へ続く)

## 上野 隆一

㈱ウエノ 代表取締役社長  
1948年山形県藤島町出身。1971年農林水産省農業者大学校卒業後、家業の農業に従事。1982年電子部品製造業を始め現在に至る。1995年山形労働局最低賃金審議会専門委員に就任。  
問い合わせ先：㈱ウエノ  
〒999-7634  
東田川郡藤島町大字三和字堰中100  
TEL 0235-64-2254 FAX 0235-64-4288  
E-mail : uenokk@seagreen.ocn.ne.jp